

4 実施の効果とその評価

本校はSSH事業を実施して3年が経とうとしている。この間取り組んだことに対する成果だと捉えられるものを、アンケート結果より抜粋する。（㊟関係資料3-1～3-3）

○タブレット端末の活用

（表： SSHアンケートの経年変化の内容抜粋 ㊟関係資料3-1より、単位は[%]）

No	設問内容	令和2年度 肯定的割合	令和3年度 肯定的割合	令和4年度 肯定的割合
75	学校生活の中でタブレットを情報収集ツールとして活用している	84.9	83.4	91.4
77	学校生活の中で、タブレットのソフトを活用し、文章や表、スライドを作成し、自己表現ツールとして活用している。	83.0	83.7	93.1

上記項目から、タブレット端末の活用が年々進んでいることが十分評価できる。また、アンケート調査の結果には出ていないが、今年度で全校生徒がタブレット端末を一人1台所有したことで、生徒の情報活用能力の育成及び教員の授業改善を推進する基盤が整備された。生徒はタブレット端末をモニターにつなぐだけで発表等を容易に行う、部活動や学校行事の資料を自分の端末で作成、共有し教員と一緒に議論するなど、自分自身の考えを表現するツールとしてタブレット端末を使う場面が如実に増加した。

○課題研究の深化について

（表： SSHアンケートの経年変化の内容抜粋 ㊟関係資料3-2より、単位は[%]）

No	設問内容	令和2年度 肯定的割合	令和3年度 肯定的割合	令和4年度 肯定的割合
11	得られた結果を基準に照らし合わせ、比較、推論ができる。	—	80.8	84.6
77	輪読するテーマや課題研究テーマに対し、仮説を立てることができる。	—	81.2	78.2

No11の比較や推論の能力については微増ではあるが1年生からの取組の成果が表れていると考える。しかし、No77の仮説設定については効果が表れていない。生徒が研究計画書を作成するための一連の流れについて教員の指導力向上が求められる。

○国際性の醸成について

（表： SSHアンケートの経年変化の内容抜粋 ㊟関係資料3-1より、単位は[%]）

No	設問内容	令和2年度 肯定的割合	令和3年度 肯定的割合	令和4年度 肯定的割合
97	高校生のうちに、外国人とのコミュニケーションをとる機会があることは、自分の大きな人間的成長につながると思う。	84.3	88.8	85.2
100	英語で自分の意見を述べたり書いたりできる	58.3	55.0	53.4

高校生のうちに外国語を用いたコミュニケーション能力を向上させる必要性を感じている傾向があることはNo97の数値から読み取れる。しかし、生徒が英語で自分の意見を表現する能力はまだ不十分であると感じているようである。生徒がコミュニケーションを取ることのできる機会を増やしたい。

○教員の変容について

（表： SSHアンケートの経年変化の内容抜粋 ㊟関係資料3-2より、単位は[%]）

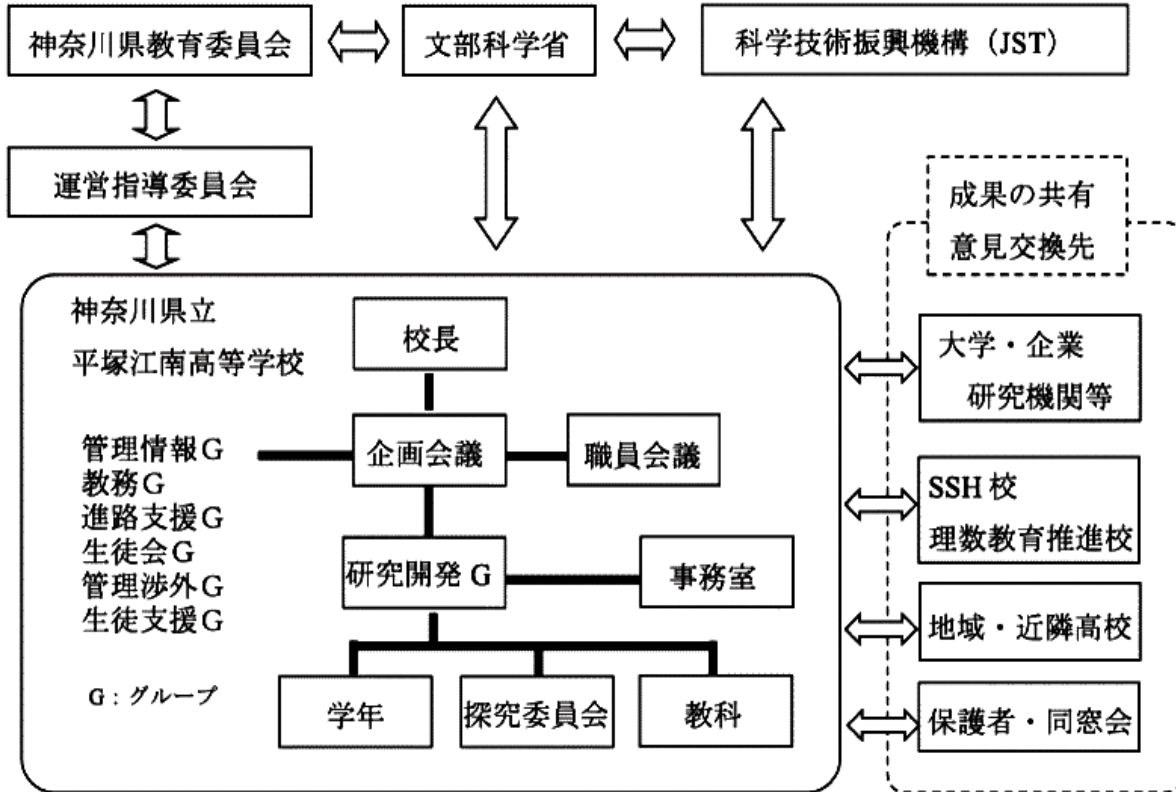
No	設問内容	令和2年度 「向上する」	令和3年度 「向上する」	令和4年度 「向上する」
5	SSHの取組に参加したことで、生徒の科学技術に対する興味・関心が向上すると思いますか。	40.7	29.3	40.0
6	SSHの取組に参加したことで、生徒の学習活動（化学、数学、情報等）に対する興味・関心が向上すると思いますか。	32.1	27.6	28.9

特に今年度は科学体験活動など様々な活用を通して、生徒の科学に関する興味・関心を高めることができた。しかし、生徒の科学技術に関する学習活動に対する意欲の向上は見られない。通常の教科指導と、学校設定科目を中核とした課題研究に関わる指導の両立が望まれる。

○校内推進体制

研究開発グループを中心としつつ、すべての教員でSSH事業に取り組むべく、様々な場での情報発信や共有に取り組んだ。SSH校としての取組も3年目になり、学校設定科目に関わる教員が年々増え、SSH事業に関する関心や理解が深まっている様子は、教員アンケートの意見を記述する欄の分量が前年よりもはるかに多いことから見て取れる。SSH事業によるカリキュラム開発の今後の成果に大いに期待されていると考えている。

5 校内におけるSSHの組織的推進体制



研究開発グループの主導のもと、学年、グループ、教科と密接に連携、協力しながら、教員全体でSSHとしてのカリキュラムの研究開発を推進している。研究開発グループは、SSH実施運営の全般に係る業務、教育課程検討に係る業務、組織的な授業改善（カリキュラム・マネジメント）に係る業務を行っており、教職員全体での理解と取組を促進するため、教員会議においてSSH事業の目的と実施内容をすべての教職員と共有しながら、SSH事業を実施している。

探究委員会は、SSH事業が始まった当初は、1、2学年の学校設定教科「共創・探究」を担当する各教科の教員で「共創探究基礎」「共創探究Ⅰ」における年間指導計画等についての情報共有、「共創探究Ⅱ」の計画に係る連絡調整などを行っていたが、3年目になって一通り科目を実施できたこともあり探究委員会の役割は果たされたと考える。今後探究委員会が担っていた業務は研究開発グループが所管する。

6 成果の発信・普及

○本校のHPにおける成果発信

学校設定科目「共創探究基礎」「共創探究Ⅱ」やSSH講演会だけでなく、海外との交流や英語での物理実験などの講習会の様子など、SSHに係る取組についてホームページ上に成果を公表し、普及を図った。

○自然科学教室

SSH事業の普及活動の一環として、8月及び12月に中学生等向けに自然科学教室を予定していたが、今年度も昨年度に引き続きコロナ禍により実施できなかった。その代わりに、8月に行われた学校説明会において、SSH係が学校設定科目「共創探究Ⅰ」の説明を行った。

○授業公開

県立高等学校及び中等教育学校を対象に、学校設定科目「数理・統計と情報」の授業をオンラインで配信し、本校のSSH事業の成果の普及を通して、神奈川県内の県立高等学校等における理数教育の一層の進展に資した。

○海外研修

グローバルサイエンススタディにおいて事前研修やシンガポールでの海外研修を通して学んだことを、3月に本校1・2学年の生徒対象に成果発表会を行う予定である。

7 研究開発実施上の課題及び今後の研究課題の方向性について

課題

○課題研究の深化に向けて

3年目が終わり、SSH事業に一通り取り組むことができた。1年の「共創探究基礎」では共通した指導を徹底できたが、「共創探究Ⅰ、Ⅱ」では個々の担当者に委ねる部分が多く、共通して全体に指導する内容が不十分であった。今後より深い研究を行うため、指導内容の見直しや改善に加え、SSH事業を所掌している研究開発グループからの積極的な情報発信が求められる。

○統計・データサイエンスに関する指導力向上

「数理・統計と情報」については、その科目の特性から担当者が少数に限定された状態で取組を進めてきた。今後の継続性を考え、より幅広く担当できるよう調整が必要である。また、課題研究に統計を活用できるように、生徒への指導を充実させる方策を検討しなければならない。

○教職員全体での推進体制

本校でのSSH事業の概要については教員に浸透しているように思われる。今後は、SSH事業の利点を共有するための説明会や研修会を通して、具体的な指導方法や事業の共通理解を図っていくことが必要である。

方向性

○課題研究の深化に向けた、教員の指導力向上

課題研究科目である「共創探究Ⅰ」「共創探究Ⅱ」は常に2学年にわたって展開されるため、指導に関わる教員が増えている。新たに指導にあたる教員が自信をもって指導にあたることができるよう、来年度は年度当初も含めて校内での教員研修会を複数回実施する方向で調整を始めている。なおこの研修会において、データ分析や統計処理の内容も扱うものとする。必要に応じて外部から講師を招くことも検討する。

○中間評価を受けて、Ⅰ期後半の取組の改善を図る

中間評価での助言を受けて、来年度以降の取組について検討する。特に学校としての事業推進体制を確立し、Ⅱ期以降を見据えた取組を検討する。

8 コロナ禍におけるSSHへの取組

今年度は、時差通学は年間を通してあったものの、短縮授業の影響をほとんど受けず、学校設定科目については予定された内容を実施することができた。ただ、講演会や発表会では全校生徒が一堂に会することがまだできないため、一部オンラインを併用して実施した。次年度以降は制限がほぼなくなり様々なことが対面で実施できると考えている。

海外研修については、年度当初には渡航の見通しが経たず、今年度も断念せざるを得ないかと思われた。しかし、渡航先や時期の変更を行い、1月末に無事に実施することができた。次年度以降も実際に現地での体験ができるように研修先との折衝を継続していくが、この間実施してきたオンラインでの取組も継続することで、より多くの生徒が国際交流に参加できるような体制づくりに努めたい。

④関係資料1 教育課程表

教育課程編成報告書

神奈川県立平塚江南高等学校長
 課程名 全日制の課程
 学科名 普通科
 本校・分校の別 本 校

入学年度		令和4年度														
学年	学 型	1年	2年	3年						小計	文系	理系Ⅰ類	理系Ⅱ類			
		8	8	文系		理系Ⅰ類		理系Ⅱ類								
教科	学 級 数 科 目 標準単位数			4		3		1								
		必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	文系	理系Ⅰ類	理系Ⅱ類				
国語	現代の国語	2	2										2	17	11~13	11~13
	言語文化	2	2										2			
	論理国語	4		2	4		2		2				4,6			
	文学国語	4			2								0,2			
	古典探究	4		3	2			2		2			3,5			
地理歴史	地理総合	2	2										2	10~12	4~11	4~11
	地理探究	3					4			4			0,3,4,6			
	歴史総合	2	2			2							2,4			
	日本史探究	3		3	3※1								0,3,6			
公民	世界史探究	3											0,3,6	7	2~6	2~6
	公民	2		2									2			
	倫理	2				2		2		2			0,2			
数学	政治・経済	2				2		2		2			0,2	12~16	20	16~18
	数学Ⅰ	3	2			2※6							2,4			
	数学Ⅱ	4	2	2		2※6			2				4,6			
	数学Ⅲ	3					6						0,6			
	数学A	2	2			2							2,4			
	数学B	2		2		2				2			2,4			
理科	数学C	2		2			2			2			2,4	9~11	13~20	13~20
	物理基礎	2	2										2,3			
	物理	4					※2	※4	※2	※4			0,3,6			
	化学基礎	2	2				1	※3	1	※3	1	※5	2,3			
	化学	4		3			1	※3	1	※3	1	※5	0,3,6			
	生物基礎	2	2										2,3			
	生 命 学	4											0,3,6			
自然科学研究*					2							0,2				
保健体育	体育	7~8	2	2	3		3		3				7	9	9	9
	保健	2	1	1									2			
芸術	音楽Ⅰ	2											0,2	2	2	2
	美術Ⅰ	2		2									0,2			
	書道Ⅰ	2											0,2			
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	4										4	18~22	18~22	18~22
	英語コミュニケーションⅡ	4		4									4			
	英語コミュニケーションⅢ	4			4		4		4				4			
	論理・表現Ⅰ	2	2										2			
	論理・表現Ⅱ	2		2									2			
	論理・表現Ⅲ	2			2		2		2				2			
	学術英語A*					2		2		2			0,2			
学術英語B*					2		2		2			0,2				
家庭	家庭基礎	2		2									2	2	2	2
	情報															
情報	情報Ⅰ	2	●	●									0~2	0~2	0~2	0~2
	情報Ⅱ	2				2		2		2			0,2			
学校外活動	ボランティア活動*		1◎	1◎			1◎						0~3◎	0~3◎	0~3◎	0~3◎
共創・探究*	共創探究基礎*		2										2	6~8	6~8	6~8
	数理・統計と情報*			1									1			
	共創探究Ⅰ*			2									2			
	共創探究Ⅱ*				1		1		1				1			
	グローバルイノベーション*		1~2◎	1~2◎			1~2◎						0~2◎			
	サイエンスインターシップ*		1~2◎	1~2◎			1~2◎						0~2◎			
総合的な探究の時間		3~6	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲				
小 計		33~36	33~36	21	4~13	24	6~11	20	6~15				91~106	96~107	92~107	
ホ ー ム ル ーム 活 動		1	1		1		1		1				3	3	3	3
総 計		34~37	34~37	26~35		31~36		27~36					94~109	99~110	95~110	
備 考	(備考) 上記の教育課程は変更もありうる。3年の選択は小計欄の単位数分を選択する。 []のある科目は、その中から、1科目を選択する。 1年「数学Ⅰ」は前期に、「数学Ⅱ」は後期に学習する。 3年「共創探究Ⅱ」は前期に学習する。 学校設定教科「共創・探究」の科目について、「共創探究基礎」2単位のうち1単位と「数理・統計と情報」1単位は、「情報Ⅰ」2単位の代替とする(●)。「共創探究基礎」2単位のうち1単位と「共創探究Ⅰ」2単位および「共創探究Ⅱ」1単位は「総合的な探究の時間」4単位の代替とする(▲)。 3年文系：※1の地理歴史は、2年に学習した科目と同じ種類のものを選択し、「日本史探究」「世界史探究」の選択者は併せて「歴史総合」を選択する。また、2年次の「地理探究」の選択者は、3年次の理系Ⅰ類・Ⅱ類の「地理探究」を選択することはできない。 3年理系：※2及び※3の理科は2年に学習した科目と同じ種類のものを選択する。※4及び※5の理科を選ぶ場合は、※2及び※3と異なる科目を選択する。 ※6の数学Ⅰの選択者は数学A、数学Ⅱの選択者は数学Bを併せて選択する。 *印のある科目は学校設定教科および学校設定科目である。 「学校外活動」および「共創・探究」の単位数◎は、卒業までに修得すべき単位数には含まない。 「共創・探究」の「サイエンスインターシップ」「グローバルイノベーション」は短期集中科目であり、2科目併せて最大2単位まで修得可能である。															

入 学 年 度		令和2年度、3年度											文系	理系Ⅰ類	理系Ⅱ類
学 年	学 科	1年			2年			3年				小計			
		標準単位数	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択					
教科	学 級 数	目	文系		理系Ⅰ類		理系Ⅱ類								
国語	国語総合	4	4									4	17	11~13	11~13
	現代文B	4		2	2			2			2	4			
	古典B	4		3								3			
	現代文研究*				2							0,2			
	古典研究*				2							0,2			
	古典鑑賞*				2				2		2	0,2			
地理歴史	世界史A	2	2									2	8~17	4~11	4~11
	世界史B	4										0,7			
	日本史A	2	2	3	4	4						2			
	日本史B	4		※1	※2	※4						0,7			
	地理B	4						4		4		0,4,7			
	世界史特論*					2						0,2			
	日本史特論*											0,2			
	現代社会	2			2							0,2			
倫理	倫理	2				2		2		2		0,2	2~6	2~6	2~6
	政治・経済	2				2		2		2		0,2			
数学	数学Ⅰ	3	2									2	12~16	20	16~18
	数学Ⅱ	4	2	3								5			
	数学Ⅲ	5						6				0,6			
	数学A	2	2									2			
	数学B	2		3								3			
	数学研究A*						2				2	0,2			
	数学研究B*						2			2		0,2			
	数学研究C*						2	2		2		0,2			
理科	物理基礎	2	2									2	9~14	13~20	13~20
	物理	4										0,3			
	化学基礎	2	2									2			
	化学	4			※2							0,3			
	生物基礎	2	2									2			
	生物	4										0,3			
	物理研究*						4	4	4	4		0,4			
	化学研究*						※5	※6	※5	※6		0,4			
	生物研究*											0,4			
	自然科学研究*						2					0,2			
保健体育	体育	7~8	2	2	3		3		3			7	9	9	9
	保健	2	1	1								2			
芸術	音楽Ⅰ	2										0,2	2~4	2~4	2~4
	音楽Ⅱ	2		2								0,2			
	美術Ⅰ	2					2			2		0,2			
	美術Ⅱ	2										0,2			
	書道Ⅰ	2										0,2			
	書道Ⅱ	2										0,2			
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4									4	18~22	18~22	18~22
	コミュニケーション英語Ⅱ	4		4								4			
	コミュニケーション英語Ⅲ	4			4		4		4			4			
	英語表現Ⅰ	2	2									2			
	英語表現Ⅱ	4		2	2		2		2			4			
	学術英語A*						2		2		2	0,2			
	学術英語B*						2		2		2	0,2			
家庭	家庭基礎	2		2								2	2	2	2
	社会と情報	2	●	●											
情報	情報の科学	2					2		2		2	0,2	0,2	0,2	0,2
	ボランティア活動*		1◎	1◎				1◎				0~3◎	0~3◎	0~3◎	0~3◎
共創・探究*	共創探究基礎*		2									2	6~10	6~10	6~10
	数理・統計と情報			1								1			
	共創探究Ⅰ*			2								2			
	共創探究Ⅱ*				1		1		1			1			
	グローバルサイエンスデイ*		1~2◎	1~2◎				1~2◎				0~2◎			
	サイエンスインターンシップ*		1~2◎	1~2◎				1~2◎				0~2◎			
総合的な探究の時間		3~6	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲						
小計			33~37	33~37	22	4~12	24	2~10	20	6~14		92~99	92~99	92~99	
ホームルーム活動		3	1	1		1		1		1	3	3	3	3	
総計			34~38	34~38		27~35		27~35		27~35		95~102	95~102	95~102	
備考	<p>(備考) 上記の教育課程は変更もありうる。3年の選択は小計欄の単位数分を選択する。 「」のある科目は、その中から、1科目を選択する。ただし2年の※1と※2では異なる科目を選択する。 1年「数学Ⅰ」は前期に、「数学Ⅱ」は後期に学習する。 3年「共創探究Ⅱ」は前期に学習する。 2年で「倫理」を選択した場合、3年で必ず「政治・経済」を選択する。 3年文系：※3の地理歴史は、※1で地理歴史を選択している場合は同じ科目を履修し、「世界史B」選択者は「世界史特論」、「日本史B」選択者は「日本史特論」を必ず選択する。 選択科目で※4の地理歴史を選ぶ場合は、※3と異なる種類の科目を選択する。 3年理系：※5及び※6の理科は2年に学習した科目を選択する。※6の理科を選ぶ場合は、※5と異なる科目を選択する。 3年理系Ⅱ類の「数学研究B」は前期、「数学研究C」は後期に学習する。 *印のある科目は学校設定教科および学校設定科目である。 学校設定教科「共創・探究」の科目について、「共創探究基礎」2単位のうち1単位と「数理・統計と情報」1単位は、「社会と情報」2単位の代替とする(●)。「共創探究基礎」2単位のうち1単位と「共創探究Ⅰ」2単位および「共創探究Ⅱ」1単位は「総合的な探究の時間」4単位の代替とする(▲)。 「学校外活動」および「共創・探究」の単位数◎は、卒業までに修得すべき単位数には含まない。 「共創・探究」の「サイエンスインターンシップ」「グローバルサイエンスデイ」は短期集中科目であり、最大2単位まで修得可能である。</p>														

④関係資料2 運営指導委員会記録

令和3年度第2回運営指導委員会議事録

日時：令和4年3月9日（水）

場所：神奈川県立平塚江南高等学校 422教室

会議出席者（敬称略）：氏名、所属・職）

（運営指導委員）森 郁恵（名古屋大学・教授）

浜野 達也（平塚市博物館・館長）

岩本 嗣（神奈川工科大学・教授）

赤羽 智（第一三共・主査）

宍戸 章子（神奈川工科大学・基礎教育講師）

スチュアート ミラー（Google for Education）

（高校教育課）増田 年克（課長）

石塚 悟史（指導主事）

永末 福太郎（指導主事）

（平塚江南高校）校長、副校長、教頭、鈴木総括教諭、植田教諭、山縣教諭、菅田教諭、栗原実習指導員

県挨拶（増田）

○指導・助言のために運営指導委員の皆様、ご出席ありがとうございます。

○1年間の取組について中間評価を視野に入れながら指導・助言をお願いします。

校長挨拶

○運営委員の皆様、お忙しい中、ご出席ありがとうございます。

○2年目のSSHが終わろうとしている中、来年度はいよいよ中間評価となります。

○県内SSH校には厳しい評価で、来年度に向けて対策していきたい。

○次年度から県内高校は1人1台端末の利用がスタートします。

○本校は2年、SSHに取り組んでいるので、沢山の視察があった。

○コロナ禍対応で国際交流はオンラインで交流できた。

参加者紹介

事務局紹介

増田（高校教育課長）、石塚（指導主事）、永末（指導主事）

進行交代（森委員長）

令和3年度の取組状況と課題（説明は教頭）

（パワーポイントによる説明）

委員の意見・質問

〔森委員〕来年度の中間評価について、文部科学省の審査はかなり厳しいのは理解している。アンケートは自己評価であるが、客観的評価についてはどう考えるか。

〔教頭〕数値や目に見えることで測ることは今、課題です。

〔鈴木〕生徒の変容の測り方は課題。論理的思考力に関しては、質的变化を示せるか。

質的な検証をしていくことが課題である。良い知恵があったら教えてほしい。

〔森委員〕偏差値が頂点では難しい。問題発想能力があるか。人よりも早く見つけて解決する方法を考えるのは偏差値とは関係ない。

数学物理ができる学生はトップ校ではないところに天才はいる。

研究発表会に出していくなど検討しないのか。

〔教頭〕研究活動の発表は今は少数で、アウトプットの方法をさせる方法の記録をして変容を測っていったらと思う。

〔岩本委員〕文部科学省の考え方は年によって違う。次の段階に繋げて行くことを運営指導委員はサポートしていきたい。学校として、弱いと感じているところを教えてほしい。

〔校長〕理系のことがメインになっているが、文系の生徒も多い。全体に取り組みさせるためにどの

- ように論理的に科学的に進めるかが課題である。文化系の研究テーマを単なる調べ学習にならないような支援が課題と捉えている。
- [森委員] 文系と言われているテーマでも洞察する力が必要である。
- [岩本委員] サイエンスインターンシップの生徒の質問で、文系なのに理系の勉強は必要なのかとあった。サイエンスに取り組んでいると、現象をしっかりと見て科学的思考力を自分の小道具にするといいよ。と言ったら納得してもらえて、いい時間だった。どういうふうに成果として出すのか、考えていきたい。
- [宍戸委員] 英語は論理的な勉強。日々の定期テストも論理的な質問をする設問を入れてほしい。発表のときも、論理の矛盾や飛躍を指摘できる。文系にいくときも論理的思考力を身につけることは大事と言いつけることが大事である。
- [森委員] 文系の生徒でも、思考が理系の場合は論理的に説明ができて、抽象的に説明することができる。授業でやらなくても、クラスの中でも一つが発表し、論議することが成長につながる。批判的思考力は大切である。コロナ禍のこともマスコミに流されてしまうという社会的な傾向があるが、その中で批判的な思考力は大事である。
- [森委員] 日本の社会でこれからの人材を育成するのが SSH である。いい方向だと感じる。
- [植 田] (3月22日の中間発表会について説明)
コロナ禍の対応でゼミ単位で発表会をする予定である。
SSH1期生は入学時から休業期間が長かった学年のため、調べ学習の域を出ないテーマも多い懸念があるが、3年9月まで取り組んで行ければと思う。
- [森委員] (中間発表会について) 当日の時間がある委員は見学してほしい。
- [宍戸委員] 1年生は見学できないのか？
- [植 田] 見学を計画しているが、感染状況によっては対面ではなくオンラインによる見学も視野に入れている。
- [森委員] 名古屋大学の研究室紹介のユーチューブを紹介
- [教 頭] 令和4年度の計画
(パワポで説明)
各学年の共創・探究、サイエンスインターンシップ、海外研修
- [校 長] 今井むつみ氏の著書を卒業式で紹介した。5月に100周年記念式典があるが、卒業生で活躍している方が多数いるので今後は各方面にお声掛けしてご協力をお願いしたい。
- [森委員] 作家の川上弘美さんがお茶の水女子大の同級生で、新聞の同級生対談で認知心理についてやっていきたい、と考えている。
- [赤羽委員] コロナ禍で実施できることが限られているが、色々な方法を使って、コミュニケーションはとれるようになってきている。
高校生はサイエンスに興味を持っているのだろうか。
研究しているとあれもこれもやりたいと思うが知識がないという壁を超える力が必要。
- [菅 田] 江南高校のすごいと感じているところ。研究テーマを見つけて取り組んでいる。放課後に研究活動をしたと申し出る。
生物基礎の振り返りで授業の中で疑問に思ったことを調べて納得したとのコメントがあった。部活では修学旅行が中止になって残念だが研究できるのは良かったと発言している。
- [赤羽委員] 実験しだすと結果が出るまでやめたくないと思うのはわかる。
それはなんだろうと考える、議論していくことは楽しいこと。
身近なことから学んでいくことができるといい。
- [森委員] 理科の教員が「研究は時間がかかる」と言っていたが、問題設定は簡単でいいと話している。論理的に説明するためには物理や化学の知識は必要になるので、議論することによって深まっていく。トレーニングを重ねていくことは大事。
- [永 末] 3月27日に探究フォーラムをオンライン開催予定。
- [校長あいさつ] 来年度が正念場になると思う。ご意見を生かして中間評価の準備をしたい。
- [増田課長] エールをいただいた。生徒の変容を測るのは難しいが素地がある生徒なので、取り組んでほしい。

令和4年度第1回運営指導委員会議事録

日時：令和4年9月22日（木）

場所：神奈川県立平塚江南高等学校 会議室

会議出席者（敬称略）：氏名、所属・職

- （運営指導委員）森 郁恵（名古屋大学・教授）
浜野 達也（平塚市博物館・館長）
岩本 嗣（神奈川工科大学/教授）
菊地 崇行（第一三共・主査）
植田 威（NPO 情報セキュリティフォーラム・理事）
（JST）利根川 太郎（主任専門員）
（高校教育課）松澤 直子（専任主幹）
石塚 悟史（指導主事）
（平塚江南高校）校長、副校長、教頭、植田教諭、大谷教諭、栗原実習指導員

〔県教委、松澤専任主幹挨拶〕

令和2年度から始まった江南のSSHも3年目で週明けに中間評価を控えています。さらなる発展に資する意見をいただきたいです。神奈川県での取り組みでもあるが、国の科学技術発展に寄与したい所存です。

〔校長あいさつ〕

5月13日の創立100周年式典の実施が無事済みでした。SSH 中間評価の結果でもう1期という先が見えてくると捉えています。まだ、1期生が3学年だが、あと2年の道筋を探したい所存です。

進行交代（森委員長）

〔学校からの説明〕

（基礎データと学校案内のカリキュラム表、パワーポイント）

委員の意見・質問（同日開催の校内生徒発表会の講評含む）

〔菊地委員〕論理的思考力、リーダーシップなどはポイントが低いので、今から育成してほしい。国際通用力はリベラルアーツ、大きなイベントで質問できるなど。再現性や「n」がいくつか。客観性。統計学を用いるべき。

〔森委員〕写真を取って面積を測るという工夫があったが、さらに深掘りしてほしい。手話、言語等趣味をいかせていないのか。客観的、定量的について、条件やトライアル数の表記がなかった。メッセージ性を発表と思込んでいるのではないかと感じた。

〔菊地委員〕リーダーシップ論で「答えが何でもいいから」とアイデンティティがないというのに驚いた。質疑応答がされていなかった。発表会では質疑応答が必須。

〔植田委員〕楽しんでやる。学生が学生に教えることが、アンケートのとり方を学生同士で教え合う等の環境づくりはあるのか。テーマが壮大すぎる傾向がある。細分化して深掘りされるような設定されるシステムがあってもいいのではないか。

〔浜野委員〕予想よりも文系の発表も多かった。内容は楽しめるがわからない部分や曖昧な分をつきつめてほしい。一つの説だけで論議を展開するのではなく、色々な説から自分たちの説が出せるといい。原典や資料を抑えるという観点が出てくると、歴史でも資料検索などを更に深めるということを期待したい。

〔森委員〕平塚市博物館を活用できるのか。

〔浜野委員〕個別質問や文献提供もしている。フォーマルな形式でなくても電話でアポ取って専門の学芸員に相談することも可能。

〔岩本委員〕学生実験で複数回指導し続ける中で、自主性を重んじながら取り組んでいくことが大切なのではないか。担当者があまり変わらないように異動させないという配慮を県にしてほしい。文科省が力を入れてやっているのだから、人事異動で担当者を替えずに少なくとも3年間は続けられるようにしてほしい。

〔森委員〕神戸の全国発表会の審査員をしたが、賞を取る研究でも足りないところはあるが、本校の発表も遜色ないと考える。これでいいんだと思ってもらって、生徒がそれを見て安心する。そんなに審査結果には差がない、生徒をリードしてほしい。

〔菊地委員〕今日の発表で既存の情報や見地では得られない結論があった。面白い。

〔森委員〕英語は専門的な知識がないのに話そうとしている。趣味の世界からすぐにノーベル賞にすぐにいける。各論で深掘りすることが大切。問題が単純化していけるといい。

〔菊地委員〕実学的に発想を活かしてほしい。

〔森委員〕1講座担当1担任を2担任にできたらさらに研究が深まるのではないか。

〔校長〕人数的には今がいっぱい。教員がSSH事業についてアンケートを取ったら、事業に対し学校全体で取り組んでいると回答した割合が、40%から80%に上がってきた。

進学校が持っている課題は進学実績を上げることが大切と考える教員は探究活動について懐疑的。教科教育に専念したい教員は探究学習が大事と学び始めている。発表の質は年々上がってきていくだろう。課題研究の手法やデータサイエンスを授業で教えていくだけでなく、生徒間や先輩後輩で伝えていくことが大切。アベレージを上げていきたい。

〔植田〕75回生の授業をつくってきた。1年目でコロナ禍だった。3年間を振り返って課題もあるが、成果は感じている。入学してくる生徒がかわってきているように思う。中学生の認識が浸透している。

〔菊地委員〕「誰もが発言しやすい発言」という発表の生徒に助言をしたら、感謝の言葉を言われた。

中間ヒアリングに向けて

〔森委員〕堂々とやればいい。神戸の発表会を見ても見劣りしないので、このまま進めてほしい。次の5年に繋がるかが大切。順調に進んでいると思う。職員も自信を持ってほしい。なにかあれば校長宛に個別に意見を寄せてほしい。

〔校長〕慶応大学の今井教授の研究室に英語の支援をしてもらっている。

〔森委員〕名古屋大学では理系の女子学生が高校に教えに行っているという実態もある。

〔校長あいさつ〕昨年度の4月5月はSSHに懐疑的な意見が多かったが、今年はない。生徒がかわってきたので、教員もかわってきていると思う。学区撤廃で生徒の入学状況が以前とかわってきているが、中学生に浸透させていきたい。今日の発表会も生徒が運営しているので、これからもそんな気風を大切にしていきたい。

〔県教委、松澤専任主幹挨拶〕

スパイスがあれば、というのは、発想が大切。教科には強い愛を持って仕事している。生徒がいきいきと社会でも活躍できるようになってほしい。

④関係資料3-3 教職員アンケート集計結果

③職員アンケート

全13項目について、過去3年間の割合を記載した。

設問1 本校のSSH事業は、学校全体で取り組んでいると思いますか。		はい	いいえ			
令和4年		73.3%	26.7%			
令和3年		79.3%	20.7%			
令和2年		24.5%	75.5%			

設問2 SSH事業として本校が現在受けている、人的支援、備品消耗品費用の充実、先進校視察・海外研修等は生徒の教育活動の充実に役立っていると思いますか。		役立っている	やや役立っている	あまり役立たない	役立たない	わからない
令和4年		37.8%	51.1%	4.4%	0.0%	6.7%
令和3年		29.3%	51.7%	6.9%	1.7%	10.3%
令和2年		64.3%	32.1%	0.0%	0.0%	3.6%

設問3 SSH事業は、生徒の主体的な探究活動・課題研究を促す動機づけになる。		なる	ややなる	あまりならない	ならない	わからない
令和4年		37.8%	44.4%	8.9%	0.0%	8.9%
令和3年		32.8%	51.7%	5.2%	1.7%	8.6%
令和2年		46.4%	28.6%	7.1%	0.0%	17.9%

設問4 SSH事業は、教員の教科指導力向上や授業改善に役立つと思いますか。		役立つ	やや役立つ	あまり役立たない	役立たない	わからない
令和4年		26.7%	37.8%	13.3%	0.0%	22.2%
令和3年		32.8%	46.6%	6.9%	1.7%	12.1%
令和2年		50.0%	25.0%	3.6%	0.0%	21.4%

設問5 SSHの取組に参加したことで、生徒の科学技術に対する興味・関心は向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		40.0%	40.0%	4.4%	0.0%	15.6%
令和3年		29.3%	50.0%	6.9%	0.0%	13.8%
令和2年		40.7%	40.7%	3.7%	0.0%	14.8%

設問6 SSHの取組に参加したことで、生徒の学習活動（科学、数学、情報等）への興味・関心が向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		28.9%	42.2%	8.9%	0.0%	20.0%
令和3年		27.6%	50.0%	6.9%	1.7%	13.8%
令和2年		32.1%	46.4%	3.6%	0.0%	17.9%

設問7 SSHの取組に参加したことで、生徒の自から取り組む姿勢（自主性・やる気等）が向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		26.7%	44.4%	6.7%	0.0%	22.2%
令和3年		32.8%	44.8%	8.6%	0.0%	13.8%
令和2年		25.9%	33.3%	7.4%	3.7%	29.6%

設問8 SSHの取組に参加したことで、生徒は周囲と協力して取り組む姿勢（協調性やリーダーシップ）が向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		28.9%	42.2%	4.4%	0.0%	24.4%
令和3年		32.8%	48.3%	1.7%	5.2%	12.1%
令和2年		32.1%	39.3%	10.7%	0.0%	17.9%

設問9 SSHの取組に参加したことで、生徒の伝える力（プレゼンテーション能力やレポート作成能力）が向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		51.1%	42.2%	0.0%	0.0%	6.7%
令和3年		46.6%	43.1%	1.7%	3.4%	5.2%
令和2年		42.9%	39.3%	3.6%	0.0%	14.3%

設問10 SSHの取組に参加したことで、生徒の、社会で科学技術を正しく用いる姿勢が向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		22.2%	53.3%	6.7%	0.0%	17.8%
令和3年		29.3%	46.6%	6.9%	1.7%	15.5%
令和2年		25.0%	46.4%	3.6%	0.0%	25.0%

設問11 SSHの取組に参加したことで、生徒の英語による表現力、国際感覚が向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		15.6%	44.4%	11.1%	0.0%	28.9%
令和3年		19.0%	41.4%	10.3%	1.7%	27.6%
令和2年		21.4%	39.3%	7.1%	0.0%	32.1%

設問12 SSHの取組に参加したことで、生徒の学習全般において、学んだことを応用することへの興味が向上すると思いますか。		向上する	やや向上する	あまり向上しない	効果はない	わからない
令和4年		20.0%	51.1%	11.1%	0.0%	17.8%
令和3年		20.7%	56.9%	5.2%	1.7%	15.5%
令和2年		25.0%	32.1%	10.7%	3.6%	28.6%

設問13 SSHの取組で、効果があると思われる取組はどれだと思いますか。（複数回答可）		質問項目		
		令和4年 (45人)	令和3年 (58人)	令和2年 (55人)
①	タブレットの活用（インターネットを利用したインタラクティブな授業展開等）	84.4%	69.0%	58.2%
②	探究活動（「共創・探究」を活用した、生徒の主体的な研究、探究活動）	60.0%	67.2%	58.2%
③	大学、企業訪問（研究室や実験室、工場等の見学）	44.4%	36.2%	45.5%
④	校外研修活動（体験的学習や実地レポートの作成）	40.0%	31.0%	30.9%
⑤	外部講師による講演会（知の探訪、知の共有）	37.8%	37.9%	23.6%
⑥	研究発表会（プレゼンテーションやポスター制作）	57.8%	48.3%	52.7%
⑦	海外研修（語学研修及び海外の大学・高校等異文化交流）	44.4%	29.3%	30.9%

④関係資料 4-1 3 学年成果発表会テーマ一覧

令和4年度SSH成果発表会(共創探究Ⅱ 最終発表会) 発表タイムテーブル ※上段がゼミ名(略称)、下段が研究テーマ

会場 時間帯	A 3-1	B 3-2	C 3-3	D 3-4	E 137選択	F 3-5	G 社会科	H 3-6	I 3-7	J 3-8
発表① 13:25~	第二言語 日本の英語義務教育はどうか	統計学 音楽を聴くことによる勉強の効率性	応用解析学 美觀仕上げ剤を起因とする蓄毒発生の防止	情報社会 マルウェアの危険性	源氏物語 源氏物語と好色一代男	スポーツ歴史文化 ゲリア選手への足の速さ	認知心理学 パーソナルスペース	実験 THE MASK	SDGs SDGsを2030年までに達成するにはどうすればよいか	第二言語 ヘレンケラーに関する研究を通して第二言語習得の本質を知る
発表② 13:35~	スポーツ歴史文化 生涯スポーツとの関わり方	スマホ脳 スマートフォンと学力低下の相関関係	実験 体育祭に一番適したトラックとはなにか	ゲーム理論 ゲーム理論を用いた歴史研究	スポーツ歴史文化 スポーツにおけるルールとマナーに関する考察	第二言語 手話と第二言語の関係性	統計学 自動販売機の現状とこれからの需要	生物学研究 森林伐採抑制のための紐作り	リーダーシップとコミュニケーション 看護師との関係性	SDGs SDGs実践のすすめ
発表③ 13:45~	情報社会 フェイクニュースについて	SDGs 節電をして持続可能な未来へ	SDGs Action for SDGs	実験 効率のよい換気方法を提案する	DIG 「減災：これからの災害に向けて～地震編～」	ゲーム理論 仕事とゲーム理論	応用解析学 水滴が球形になるわけ	スマホ脳 スマホと現代社会	スポーツ歴史文化 なぜ日本でeスポーツが発展しないのか	応用解析学 大学入試数検問題の比較
発表④ 13:55~	源氏物語 策士部とアンパ・コムネアから学ぶ「一往らのための学び」	情報社会 情報社会による多種多様な問題を情報コミュニケーションの観点から解決するためには	歴史と地理 いまにつながる平塚の歴史	SDGs 節電をすることでSDGsの達成を目指す	リーダーシップ 誰もが意見を言うしやすい環境について	世界史 古代文明と保存食糧の関係性	スマホ脳 SNS時代のコミュニケーションツールの使い分け	ゲーム理論 宣言しけんけんのみ勝法について	情報社会 ファイアウォール	スポーツ歴史文化 スポーツの世界大会と、その歴史的・社会的背景
発表⑤ 14:05~	ゲーム理論 勉強と友人関係のジレンマ	城 難攻不落の城と呼ばれる条件は何か	生物学研究 アレロパシブ活性による雑草の発芽抑制	スポーツ歴史文化 黒人と水泳競技	第二言語 第二言語習得で第一言語の使用について	応用解析学 空気抵抗と形状について	第二言語 「言語的な距離」と語彙量と英語学習の関係性	SDGs SDGsを2030年までに達成するにはどうすればよいか	実験 植物の温度耐性	リーダーシップ 面識がない生徒同士の関係性の向上を目指す実験と提案
発表⑥ 14:15~	世界史 戦争と人類の歴史	認知心理学 短時間の開眼が及ぼす効果の調査	ゲーム理論 四人のジレンマから考える価格競争の目今	SDGs 首都移転のための準備に関する考察	スマホ脳 スマホ利用と勉強時間	生物学研究 紙類シュレッダーダスターの分解と活用方法について	スポーツ歴史文化 現代のスポーツマンシップとその意義	第二言語 音読と読解の関係性	世界史 プラスチックの歴史について	スポーツ測定 応援は選手のパフォーマンスを高めるのか～バスケットボール編～
休憩、2年生は参観教室移動										
発表⑦ 14:35~	DIG 学校における洪水対策	応用解析学 ツバルを救う	スマホ脳 自費申し添付とスマホのアラーム機能	生物学研究 チョークの原材料によるアレルギー効果について	情報社会 コミュニケーションの変化が社会に及ぼす影響	SDGs 未来の地球を守るには	実験 最良の消滅ブロックとは	スポーツ歴史文化 スポーツはどんな力を持つのか	スマホ脳 紙とデジタルと勉強との関係性	世界史 チュールリッからみた世界史
発表⑧ 14:45~	スマホ脳 スマホ依存症の自覚とスマホ依存解消法	歴史と地理 湘南はどこなのか	城 観光資源であり貴重な文化財でもある現代の城の役割	第二言語 リスニングの効果	スポーツ測定 パスは勝敗を分ける	情報社会 実生活に置いて最適なpcの選び方	城 酸性雨は木造建築物の保全に影響を及ぼすのか	情報社会 高校生のスマホのセキュリティについて	第二言語 第二言語習得と母語の関係	ゲーム理論 得損とゲーム理論
発表⑨ 14:55~	リーダーシップ スクールカーストと生徒のリーダー性に影響する研究	第二言語 日本と外国の英語教育の違いと改善	情報社会 サイバー攻撃の将来	応用解析学 ルービックキューブはなぜ解けるのか?	応用解析学 より安全に自転車登校することと信号機及び摩擦力の関係性	スマホ脳 学習とスマホ利用時間	歴史と地理 コロナ禍でなぜ登山客が減少したのか	世界史 食料保存方法から見る世界の歴史	応用解析学 数学的ルービックキューブ	DIG 平塚市大町の「ハザードマップ」を作る
発表⑩ 15:05~	スポーツ測定 運動能力を可視化しよう	スポーツ歴史文化 メディアが野球にもたらした影響について	第二言語 幼児期の英語教育の効果	歴史と地理 龍城ヶ丘ブル	世界史 プラスチックの歴史と与えた影響	リーダーシップ 形から入るパワースピーチ	SDGs 2030年までにSDGsを達成するにはどうしたらよいか	情報社会 e-8論法と高校数学の深い理解	ゲーム理論 ドナーとゲーム理論	情報社会 高度化するサイバー攻撃に対する個人の対策
発表⑪ 15:15~	応用解析学 数学と建築物の美しさの関係	生物学研究 pH数値におけるかいわれ大根の成長について	スポーツ歴史文化 サッカーの戦術の変遷とその歴史	スマホ脳 SNSの使用目的による使用時間や依存度の違い	ゲーム理論 ゲーム理論で人を探る	実験 粉塵爆発	情報社会 それって「情報」? それとも「噂」?	リーダーシップ 高校生に効果的な率先垂範・同僚支援	スポーツ測定 「バスケットボールの試合での3p、2p、FTの確立と勝敗の関係性」	スマホ脳 スマホ依存の解消

令和4年度SSH成果発表会(共創探究Ⅱ 最終発表会) 発表タイムテーブル ※上段がゼミ名(略称)、下段が研究テーマ

会場 時間帯	K 2-1	L 2-2	M 2-3	N 2-4	O 2-5	P 2-6	Q 物理室	R 生物室	S 2-7	T 2-8
発表① 13:25~	スマホ脳 テクノロジーと宗教	ラスパイ プログラミングを使っただサイトの自動更新の方法	生涯スポーツ 生涯スポーツ研究・開発 オールボール	持続可能な化学 植物の日焼け	城 従来の難攻不落の城と、新たな難攻不落の城	歴史と地理 首都防衛の要 神楽川と干瀬	リーダーシップ グローバリに活躍できる医学生とは何か	世界史 様々な食文化からつくりあげられたFAIE	SDGs 発展途上の国の教育の支援を行うには	実験 摩擦の影響
発表② 13:35~	世界史 プラスチックの歴史と今後の環境	城 武人のこころ	地球環境(化学) バイオリファクター～容器によってアルカリン発酵量は変わるのか～	生涯スポーツ ペーパーボール	ラスパイ 共創探究Ⅱ・Ⅲ 研究論文「デジタルサイネージの未来」	情報社会 情報社会の発達と平均年収の推移	第二言語 効率の良い第二言語習得方法を見つける	源氏物語 平安時代の男色	実験 四つ葉のクローバーの存在確率	認知心理学 平塚江南高校の過去から現在までの学校行事と生徒の特徴
発表③ 13:45~	ラスパイ デジタルサイネージの電源制御	源氏物語 当時の発音方法と史料からみる日本語の変遷とそれに基づく100年後の日本語	情報社会 情報社会における対面コミュニケーションの必要性	第二言語 英単語 効率的な暗記方法	生涯スポーツ 生進スポーツ『パドス』の研究・開発	城 絆の包をもとに、人を殺していた黒糖村が思いつく	スマホ脳 スマホと娯楽	第二言語 語学翻訳と英語習得の関係性について	認知心理学 自信につける「褒め」モチベーションのための3つのポイント	歴史と地理 平塚の地名と歴史
発表④ 13:55~	スポーツ歴史文化 サッカーにおけるスポーツビジネスの関わり	地球環境(化学) バイオリファクターの活性が低下するのはなぜ日本人の第二言語習得率が低いのか	第二言語 SDGs	SDGs 環境にも労働にも優しい社会	認知心理学 オノマベ	城 構造の変化とその背景	スポーツ測定 球種それぞれの特徴～ストリート、チェンジアップについて～	DIG 予想される災害被害物の知識完了日数を基準に、災害発生から復興までの日数を予測する	歴史と地理 中宗御殿と平塚	第二言語 学校の英語の授業が生徒に与える影響の再調査 (Reading, Listening, Writing and Speaking) への意識の比較
発表⑤ 14:05~	持続可能な化学 ライフストローの効果を確認	歴史と地理 平塚の地名の由来	城 防人の歌にみる作者の思い	源氏物語 文字の盛衰	情報社会 コンピュータの脆弱性	実験 最も効率の良い水切りとは	スマホ脳 バスケットボールと二次方程式	応用解析学 スマートフォンを用いた健康被害	情報社会 スマートフォンを用いた健康被害	情報社会 SDGs
発表⑥ 14:15~	地球環境(化学) バイオエタノール生成のためのイースト菌培養方法の比較	情報社会 時代の変化と不正アクセスの関連性とその対策について考える	SDGs 生ゴミを減らすには	歴史と地理 平塚空襲について～平塚の復興物語～	SDGs SDGsについての企業活動と私達にできること	応用解析学 出生数の将来推計	情報社会 現代のマスメディアについて	持続可能な化学 バイオエタノールはなぜ普及しないのか	スマホ脳 スマホゲーム依存症	応用解析学 素数
休憩、2年生は参観教室移動										
発表⑦ 14:35~	歴史と地理 平塚八幡宮	第二言語 手話	持続可能な化学 学校内の水質調査	認知心理学 勉強と五感の関係性について	城 武人のうた 総集編	SDGs Action for SDGs～未来への道標～	ゲーム理論 四人のジレンマについての思考実験と他事例への応用	スポーツ測定 視力がスポーツに及ぼす影響	ラスパイ 後出しジャンケン機	城 権力者の城の共通性について
発表⑧ 14:45~	リーダーシップ みんなが登壇するリーダーシップ	生涯スポーツ ウォッチマン ～スポーツをする本日の意味～	認知心理学 短期記憶の活用	ラスパイ デジタルサイネージにおける電源制御	歴史と地理 平塚八幡宮の歴史	世界史 大気質と気候の関係と私たち	世界史 チーズから見た世界史	スポーツ歴史文化 現代の製造とその展望	応用解析学 言と物との関係	スマホ脳 スマートフォンと通知音と集中力の関係性
発表⑨ 14:55~	源氏物語 光源氏の変遷観から『源氏物語』を読む	リーダーシップ 思考と経営	ラスパイ Donkey Car	城 今や昔のうたこころ	第二言語 言語の習得の難しさ	スマホ脳 スマートフォン使用と睡眠の質	スポーツ歴史文化 GKの役割と変遷	ゲーム理論 ゲーム理論と学校生活	城 首里城 浮遊研究	情報社会 プロバガンダ研究からマスコミ研究へどのように移り変わったのか
発表⑩ 15:05~	情報社会 世界初のハッキングと現代の知識を用いたそのセキュリティ方法	持続可能な化学 葬油からバイオ燃料を作ろう	源氏物語 をかしな正産	地球環境(化学) パイオエタノールから地球環境を考える	スマホ脳 スマホの使い始めた年齢と依存の関連性	認知心理学 近現代文学教育論 ～授業、してみよう～	DIG 余目川の洪水被害の原因の考察と今後の対策について	リーダーシップ リーダーシップ～理恵の政治体制とは～	第二言語 効果的な韓国語の学習法について	統計学 信号機の間隔の謎
発表⑪ 15:15~	第二言語 言語の学び方	歴史と地理 相模湾と湘南の人々	情報社会 スマホのセキュリティについて	持続可能な化学 ハイブリッドの強度と枚数の関係	情報社会 世界をこえて伝えたい日本文化～5分で分かる小倉百人一首～	ラスパイ 無線マイコンモジュールと統計	ラスパイ フィジカル思考と統計	ラスパイ フィジカル思考と統計	ラスパイ フィジカル思考と統計	ラスパイ フィジカル思考と統計

④関係資料4-2 3学年成果発表会アンケート集計結果

令和4年(2022)年度 SSH成果発表会 振り返りアンケート集計結果(3年)

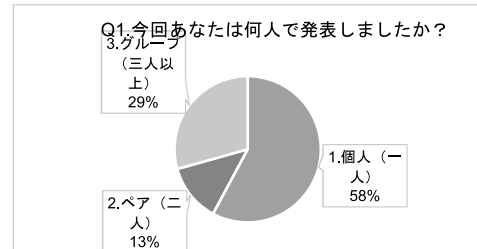
【SSH成果発表会】

- 1 目的 75回生(3年生)は共創探究Ⅱの成果を発表することで自身の研究を批判的に総括する機会とする。76・77回生(2・1年生)は研究の成果及び発表に触れることで次年度の共創探究Ⅱ・Ⅰへのレディネスを形成する機会とする。
- 2 日時 令和4(2022)年9月22日(木)4・5限 13:15~15:35 ※追発表会：10月6日(木)5限LHR及び文化祭期間

1. 3年(回答数 242。内 9/22発表者 212、追発表者 30)

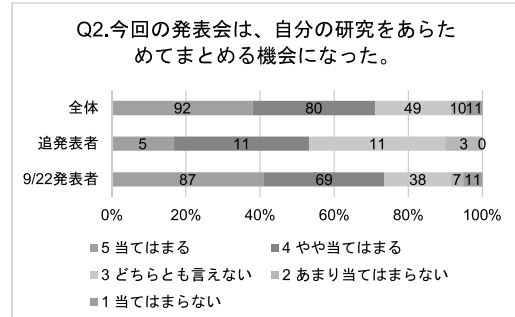
Q1.今回、あなたは何人で発表しましたか？

	9/22発表者	追発表者	全体	全体割合
1.個人(一人)	114	26	140	58%
2.ペア(二人)	28	3	31	13%
3.グループ(三人以上)	70	1	71	29%
計	212	30	242	100%



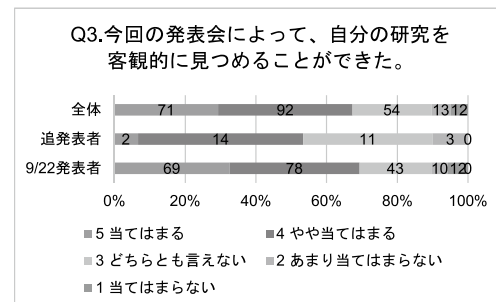
Q2.今回の発表会は、自分の研究をあらためてまとめる機会になった。

	9/22発表者	追発表者	全体	全体割合
5 当てはまる	87	5	92	38%
4 やや当てはまる	69	11	80	33%
3 どちらとも言えない	38	11	49	20%
2 あまり当てはまらない	7	3	10	4%
1 当てはまらない	11	0	11	5%
計	212	30	242	100%



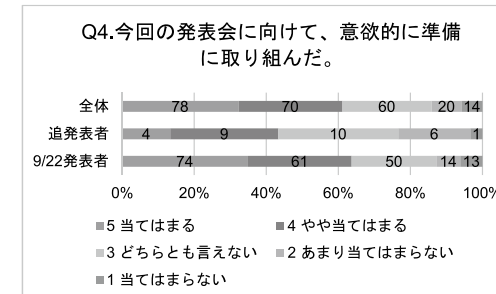
Q3.今回の発表会によって、自分の研究を客観的に見つめることができた。

	9/22発表者	追発表者	全体	全体割合
5 当てはまる	69	2	71	29%
4 やや当てはまる	78	14	92	38%
3 どちらとも言えない	43	11	54	22%
2 あまり当てはまらない	10	3	13	5%
1 当てはまらない	12	0	12	5%
計	212	30	242	100%



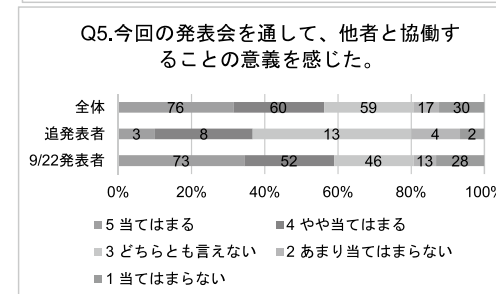
Q4.今回の発表会に向けて、意欲的に準備に取り組んだ。

	9/22発表者	追発表者	全体	全体割合
5 当てはまる	74	4	78	32%
4 やや当てはまる	61	9	70	29%
3 どちらとも言えない	50	10	60	25%
2 あまり当てはまらない	14	6	20	8%
1 当てはまらない	13	1	14	6%
計	212	30	242	100%



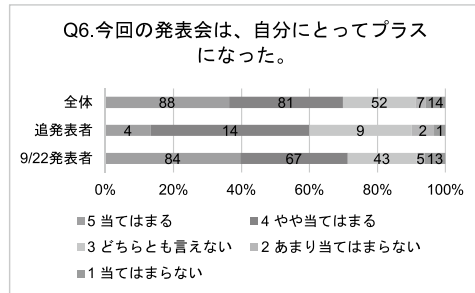
Q5.今回の発表会を通して、他者と協働することの意義を感じた。

	9/22発表者	追発表者	全体	全体割合
5 当てはまる	73	3	76	31%
4 やや当てはまる	52	8	60	25%
3 どちらとも言えない	46	13	59	24%
2 あまり当てはまらない	13	4	17	7%
1 当てはまらない	28	2	30	12%
計	212	30	242	100%



Q6. 今回の発表会は、自分にとってプラスになった。

	9/22発表者	追発表者	全体	全体割合
5 当てはまる	84	4	88	36%
4 やや当てはまる	67	14	81	33%
3 どちらとも言えない	43	9	52	21%
2 あまり当てはまらない	5	2	7	3%
1 当てはまらない	13	1	14	6%
計 (n=)	212	30	242	100%



Q7. Q6でそう答えた理由を書いてください。(抜粋)

観点	Q6回答	記述
研究	5	研究を進める上で新しい観点からテーマを見つめ直すことができたから。
		最初の研究目的と結果のずれを確認するとともに、考察をまとめ直す機会になったから。
		研究の流れ、論理的思考などを学ぶことができたから。
		曖昧だったところを発表するためにまとめたことで理解が深まった
		今回の発表会がこれまでの自分の研究を客観的に見つめる機会となり、自分の研究の意義と成果を再確認できたから。
研究	4	発表にむけて研究を客観的に見ても分かりやすいようにまとめ直したことで、自分のしてきた活動を振り返り、活動の指針の立て方などを反省することができた。
		プラスにはなかったと思うが、調べる方法がほぼインターネットしかなく、あまり充実した研究にはなっていないと感じたから。
		縛られたテーマのまとめ学習でなくて自分の興味あるのが調べられるのがよかったから
		普段疑問に思ってる事をここまで深く考えることは中々無いのでプラスになったと思う
		誰かに向けて発表すると、実験での改善点や、記録の取り方など改善するところが見つかりやすかったから
研究	3	ただやった事をまとめただけだから
		文理様々なジャンルの発表をきき、物事を考える視野が広がったが、文系の自分から見て、理系の専門的な発表をきいて深い理解に繋げることは難しいと感じた。
		知りたかった、疑問に思ったことを解決することはできたが将来に役に立たなそうだから
		ゼミが望んだ形では出来なかったから
		1
プレゼン	5	文系から理系へ多岐にわたったテーマの発表に触れることができ、また参考となる発表の仕方やスライドのまとめ方を見つけることができた。
		プレゼンをする能力は、職業に関係なく求められるから。
		三年前と比べて緊張せずに人前で発表でき、自分の成長を感じられたから。
		人前に出るのが苦手な自分を変えるチャンス。いい機会でした。
		自分の発表をまとめてから、他人の発表を見ることによって自分に足りなかったことなどを見つけることが出来たから。
プレゼン	4	高校という場でプレゼンスライドを作り研究発表する機会があったのは、これから先大学や社会にでてからプレゼンする際に自分にとってプラスになる経験だと思っているから。
		「自分の伝えたいことをとにかく言う」ことばかり考えていたが、発表会と準備を通じ、「聞く人にとって分かりやすい発表、本当に伝えたいことは何か」を意識できるようになったため。
		知らない人たちに発表するという緊張する環境下で今まで研究してきた成果をうまく伝えられるように考えるきっかけになったから
		人前でこのように大々的に発表することはなかなかないので貴重な機会だなと感じました。
		自分が考えた内容を相手に伝える、アウトプットのいい練習になったため
プレゼン	3	緊張した空気の中で人前で話せて自信になりました。
		もともと自分は人前で話すのが苦手なので、こういう自分の意見をまとめられる場があつてとてもいいものになったから。
		将来の事を考えるきっかけになりました。
		大学でどのような分野を勉強したいかがより具体的になった。
		推薦入試の話題になるから
プレゼン	5	自分の研究を発表する機会があったこと、他社の研究や発表を聞くこと、全てが自分にとって参考になるものだったからです。
		人前で自分のまとめたことを発表する機会はなかなかないから
		研究や発表のスキルが上がったから。
		自分で再現できるようなことではなく、たくさんの人の協力を得たおかげで実現できたものなので、得られるものがないはずがないから。
		テーマが効率の良い学習法の研究だったので、これからの勉強に生かせると思ったからです。
キャリア	4	大学で行うような高度なことをしたことで、自分の行きたい道を広げることができたかなと思いました。
		また他のゼミの発表を聞くことで本来触れないであろう単元に触れることができ、とても有意義な時間だと思いました。
		他者の発表を聞いたことで、自分が知らなかった情報を得て視野を広げられたと思うから。また、同じ学年にこんなにも研究・発表が上手な人がいるのだということを知れたから。
		勉強時間が削られたところがマイナスだったが、人前で発表することを久しぶりに体験できたし、スライドを作る技術も向上させることができたのがプラスだった
		何度か同じようなことをやってきたから。
キャリア	3	意欲的に準備に取り組んだから。
		プラスになったと少し思うから。
		勉強の時間が削られたから。もう少し時期を早めて欲しかった。
		発表の意味をあまり感じられなかった。
		あまり準備をしっかりと行えなかったため。
キャリア	2	この時期にスライドの準備が大変だった
		正直なところ受験勉強したい。
		個人だったから
		発表会の有無は研究や論文に影響しなかったから。他者と協働することの意義を感じるタイミングはなかったから。
		1

④関係資料5

講演会アンケート

令和4年度 SSH講演会 生徒アンケート集計結果

令和4年9月29日（木）実施（講演会・アンケート共）

対象：全学年生徒（回収計 796名）

※回答は質問に対して「5=当てはまる」から「1=当てはまらない」の5件法である。

Q1. 今回の講演会は興味を持てる内容だった。

	5	4	3	2	1	計
1年生	72	100	82	35	13	302
2年生	57	92	86	28	16	279
3年生	57	79	56	15	8	215
全体	186	271	224	78	37	796
全体割合	23%	34%	28%	10%	5%	
肯定的割合(5+4)	57%		否定的割合(2+1)	14%		

Q2. 今回の講演会を通して、探究的な学びについて理解が深まった。

	5	4	3	2	1	計
1年生	72	106	95	21	8	302
2年生	56	103	87	21	12	279
3年生	55	68	65	18	9	215
全体	183	277	247	60	29	796
全体割合	23%	35%	31%	8%	4%	
肯定的割合(5+4)	58%		否定的割合(2+1)	11%		

Q3. 今回の講演会を通して、科学的な見方・考え方について理解が深まった。

	5	4	3	2	1	計
1年生	79	102	91	21	9	302
2年生	50	89	104	20	16	279
3年生	45	69	72	18	11	215
全体	174	260	267	59	36	796
全体割合	22%	33%	34%	7%	5%	
肯定的割合(5+4)	55%		否定的割合(2+1)	12%		

Q4. 今回の講演会を通して、「論理的に考える」ことについて理解が深まった。

	5	4	3	2	1	計
1年生	67	106	99	23	7	302
2年生	51	97	98	23	10	279
3年生	49	70	75	14	7	215
全体	167	273	272	60	24	796
全体割合	21%	34%	34%	8%	3%	
肯定的割合(5+4)	55%		否定的割合(2+1)	11%		

Q5. 今回の講演会を通して、「課題を設定する」ことについて理解が深まった。

	5	4	3	2	1	計
1年生	52	85	114	38	13	302
2年生	44	78	106	31	20	279
3年生	44	58	82	20	11	215
全体	140	221	302	89	44	796
全体割合	18%	28%	38%	11%	6%	
肯定的割合(5+4)	45%		否定的割合(2+1)	17%		

Q6. 今回の講演会を通して、課題を解決する方法や手順について、理解が深まった。

	5	4	3	2	1	計
1年生	56	91	116	26	13	302
2年生	48	95	91	25	20	279
3年生	44	60	81	21	9	215
全体	148	246	288	72	42	796
全体割合	19%	31%	36%	9%	5%	
肯定的割合(5+4)	49%		否定的割合(2+1)	14%		

Q7. 今回の講演会は、自分のキャリアを考える上で参考になった。

	5	4	3	2	1	計
1年生	67	98	101	27	9	302
2年生	60	83	91	30	15	279
3年生	49	55	78	22	11	215
全体	176	236	270	79	35	796
全体割合	22%	30%	34%	10%	4%	
肯定的割合(5+4)	52%		否定的割合(2+1)	14%		